

紅色の水先案内人

——李永平のミューズ朱鴿をめぐる——

及川 茜

●
●
●
●

序

李永平は一九四七年にボルネオ島の英領サラワク（現マレーシア・サラワク州）のクチンに生まれ、台湾大学に進学した後、六年に及ぶ米国留学を経て台湾に定住し、ボルネオ島、台湾、アメリカの三つの土地の経験を作品にしている。^①

二〇一五年までに発表されている李永平の長篇小説五作のうち、『海東青——台北的一則寓言』^②（一九九二年）、『朱鴿漫遊仙境』^③（一九九八年）、『雨雪霏霏』^④（二〇〇二年）、『大河尽頭』^⑤（上巻二〇〇八年、下巻二〇一〇年）の四作に朱鴿という少女が登場する。つまり、連作短篇によって一

つの長篇が構成される『吉陵春秋』（一九八六年）^⑥を除くすべての長篇作品に共通して、この名を持つ少女が姿を現していることになる。

自ら「ミューズ」と語るこの八歳の少女、朱鴿について李永平は次のように語っている。

執筆の過程で、作家はみな心に読者あるいは「聞き手」を設定するでしょう。私の話を聞いてくれる朱鴿は八歳の幼い少女で、永遠に成長しませんが（ミューズが年をとるわけはありませんから！）、目から鼻に抜けるように賢くて、他人の七、八倍も頭の回転が速く、世故にも長けていますし（何といっても台北の街角をぶらついているのですからね）、肝心なのは、私と心が通じ

合っていることです。こうした読者あるいは聞き手は、作家たちが寝ても覚めても探し求める相手なのです。幾度も幾度も尋ね回り、朱鴿を探し出せたのは、私の文筆生涯で最大の幸運でした。

しかし、朱鴿の「聞き手」としての役割が前面に現れるのは、『雨雪霏霏』以降の作品においてのことである。それ以前の二作に登場する彼女は、どのような役割を担っているのだろうか。また、四作に共通して、朱鴿が見聞きするのは、あるいは心に潜む魔の記憶であり、あるいは幼い少女が受けた性的虐待である。こうした耳を覆いたくなるような物語を引き出す「ミューズ」としてこの八歳の少女が設定されたのは、一体なぜなのだろうか。

本稿では『海東青』『朱鴿漫遊仙境』『雨雪霏霏』『大河尽頭』の長篇四作をめぐり、朱鴿という少女が作中で担う役割について考察する。

一 長篇四作の概要と対応関係

朱鴿の登場する四作の長篇は場面やエピソードを少しずつ共有することによって重なり合い、連関した世界を形成している。ある作品の中で描写された情景は、後続の作品で反復されることによって特別な意味が附与される。読者

は前作との関係において個々のエピソードの位置づけを把握し、有機的な関連の中で読み解くことになる。したがって、ある特定の作品のみを抜き出して考察を加えるのではなく、複数の作品の連関によって築かれた李永平の作品世界の総体を論じることが要求されるといえるだろう。

いずれも邦訳が備わらないため、以下に概要と共に作品相互の関係を整理してみよう。

(一) 海東青

(1) 概要

主人公の靳五はボルネオ島出身で、「海東」の大学を卒業した後、八年にわたるアメリカ留学を終えて、再び「海東」の大学に戻り教壇に立つ。朱鴿は下宿先の向かいの雑貨屋の娘として登場する。

物語は留学から帰った主人公の靳五が「海東」の「鯤京」の街に降り立つところから始まる。「台北の一つの寓話」との副題が冠されることから明らかなように、「海東」は台湾、「鯤京」は台北を暗示する。

この作品は明確な筋を有さず、靳五の目に映る「鯤京」の街が性的な誘惑に満ちた姿で描き出される。そこでは十代の少女たちが常に欲望のまなざしに晒され続けており、街の至る所に物質的な誘惑の魔手が待ちうけている。靳五は同じ下宿に暮らす兄妹の一七歳の小舞、一五歳の亜星、

小舞の恋人で中学三年生の張滂ら少年少女、さらに小学生の朱鵠と共に街を遊歩する。

斬五が鯤京に着くのが中秋節の夜であり、最後の場面が母の日の前夜（五月一日）であることから、八カ月ほどの期間が描かれていることがわかる。背景となる年代は後に詳述する通り、一九八七年から九一年と推定される。

五〇万字に及ぶこの大作は、第一部「秋、一圃水月」（秋、水のごとく澄んだ月）、第二部「冬、蓬萊海市」（冬、蓬萊のかいやぐら）、第三部「春、海峡日落」（春、海峡の日没）の三部構成で、各五章ずつが収められ、全一五章から成る。

(2) 他の作品との関連

主人公の斬五は『吉陵春秋』各篇においてすでにその原型となる姿を見せている。『吉陵春秋』の「蛇の呪い」では、主人公の克三が同室の学生に子供の頃の体験を語ってきかせるが、聞き手となるこの学生の名前が斬五である。同「荒城の夜」で克三が帰郷の途中に渡し船で乗り合わせた少女・秋棠の後をつけてゆく場面は、『海東青』で少女娼婦を追って鯤京の街をさまよい歩く斬五の描写と類似する。『吉陵春秋』の「降りしきる春雨」で秋棠と小七がふざけあう場面も、『海東青』冒頭で斬五が秋棠という少女を思い出す場面として反復される。すなわち、『海東青』の斬五には、『吉陵春秋』の克三と小七の形象が投影され

ているといえよう。

(3) 版本

『海東青』の初版は一九九二年であるが、二〇〇六年の第二版も「本来なら再版を機に全体の文章に徹底的に手を入れ、小説の「熟成度」を高めるべきところだが（中略）修正に関してはまた別の機縁を待ちたい」とあり、初版から改稿されてはいない。ただし、「出埃及第四十年——『海東青』序」は、「ある特別な状況下で倉卒のうちに書き上げたもので、自分のこの本に対する真実の感覚を伝えてはいない」として削除され、代わりに作品集『迫迫——李永平自选集』（二〇〇三年）より自序「文字因縁」のうち『海東青』執筆に関わる部分が抄録されている。

(二) 朱鵠漫遊仙境

(1) 概要

主人公の朱鵠は八歳、好奇心に目を輝かせ、同級生の柯麗双、水薇、林香津、連明心、張濃、葉桑子と共に台北の街を漫歩する。そこではまだ第二次性徴も迎えぬ少女が性的欲望の対象とみなされ、その身体に金銭的価値が付されている。早熟な朱鵠と、夜な夜な繁華街での花売りを強いられる。柯麗双は、眼前に展開される様々な事象を友人たちに解説して聞かせる。最後に彼女らは、トイレを借りようとするホテルに飛び込むが、そこは少女を誘拐して売り飛

ばす犯罪組織のアジトであり、そのまま七人は消息を絶つてしまう。

舞台は民国七八年（一九八九年）の夏、戒嚴令の解除を経て急変のさなかにある台北である。

本作は全部で以下の各部から構成される。漫遊之一「七蓬飛颺的髮絲」（風になびく七人の髪）、漫遊之二「父與女」（父と娘）、漫遊之三「驪歌滿城」（別れの歌が響く街）、漫遊之四「夏日飄起女兒香」（沈香ただよう夏の日）、漫遊之五「一場成人遊戲篇」（大人の遊戲篇）、漫遊之六「群玉山頭」（群玉山にて）、漫遊之七「遊仙窟」の七部である。

(2) 他の作品との関連

『海東青』の最終章で朱鵠一家は転居するが、本作では朱鵠の視点からその直後の夏休みの出来事が描かれる。登場人物やエピソードが重なることから、『海東青』と本作が直接の継承関係を有することは明らかである。

(3) 版本

初版は台北の聯合文学出版社より一九九八年に、第二版は同出版社より二〇一〇年に刊行されている。再版に当たっては、「二字たりとも直さず、文章記号の一つに至るまで変更を加えることなく、（中略）再び世間に出すことに決めた」と作者自ら語っており、新版での改稿はなされていない。

(三) 雨雪霏霏

(1) 概要

語り手は八歳の少女・朱鵠と知り合い、手を取り合って夜の台北を遊歩しつつ、ボルネオ島で過ごした幼年時代の思い出を語って聞かせる。しかし冒頭で朱鵠は何年も前に姿を消していることが示され、街を歩きながら物語したのは語り手の実際の経験なのか、それとも想像の出来事なのかは曖昧にされる。『海東青』『朱鵠漫遊仙境』の両作が三人称で書かれるのに対し、『雨雪霏霏』は一人称である。

全体の構成は追憶一から追憶九までの九つの章から成る。九つの追憶の後、初版には一千字足らずの短い「尾声」（エピローグ）が付されているが、「修訂版」および上海人民出版社の簡体字版（二〇一四年刊）では削除されている。

(2) 他の作品との関連

この作品では朱鵠の背景は解説されず、冒頭に「多年の昔に私は幸運にも朱鵠と知り合い、年の離れた二人が手を取り合って不思議な縁を結んだ。当時私は台北のある大学の外国語学部で教壇に立っており、毎日夕方に授業を終えて宿舎に帰る時、いつも小さな女の子が、ひとりぼっちで市立古亭小学校の校門の階段にしゃがみ、脇にかばんを置いて、膝を抱え、顔を上げて目を細め眉をしかめ、ぼんや

りと街の西側の淡水河の河口の海峡に浮きつ沈みつする
猩々緋の太陽を眺め、ずっと長いこと、路地の中の家に戻
ろうとせず、ひたすらもの思いにふけっているのを目にし
ていた」(三七頁)、「しかしある日、彼女は突然姿を消し
てしまった」(三八頁)^⑪と述べられるのみである。した
がつて、彼女が『海東青』および『朱鵠漫遊仙境』の朱鵠
と同一人物なのかは知るすべがない。

ただし、『海東青』で描かれたエピソードは、『雨雪霏
霏』においても繰り返し変奏されている。たとえば、『雨
雪霏霏』のクライマックスに相当する「追憶九望郷」の
章では、主人公が朱鵠と共に、絶滅した台湾の原生魚「庵
仔魚」を尋ねて新店溪を遡行する。そこで主人公は朱鵠
に、夜中に庵仔魚の漁を見に行き、数匹分けてもらって酒
の肴にした大学時代の思い出を語って聞かせる(二二五―
二二〇頁)。このエピソードは『海東青』において、靳五
がまず第二章「瓊安」でアメリカからやって来た女友達の
ジョン(瓊安)に語り(六五―六八頁)、第十三章「山
中一夕雨」において亜星に語って聞かせた(八二九―八三
〇頁)話と、人名を入れ換えた点を除けば全く同じである。^⑫

(3) 版本

単行本として刊行された『雨雪霏霏』には以下の三種が
ある。二〇〇二年に天下遠見出版より発売された後、二〇
一三年に「全新修訂版」(以下「修訂版」)として書き改め

られた版が麦田出版より刊行されている。^⑬また、この修訂
版に基づき、二〇一四年には上海人民出版社より簡体字版
が刊行されている。^⑭

修訂版では映画などの作品名が『』でくくられると
いった表記上の訂正や、改行を加えた箇所が見られるほ
か、全体にわたって字句が細かく改められているものの、
数行にわたる文章の削除や増訂はごくわずかである。比較
的大きな改変としては、たとえば、「修訂版」では冒頭に
新約聖書からヨハネによる福音書の「あなたたちの中で罪
を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」
(新協同訳)が掲げられており、それに従い、「追憶
九望郷」の篇では元の「僕は人でなしだ、魔物なんだ」
(二〇九頁)が「僕は罪人だ、石を取って投げつけてくれ！
聖書に描かれているように」(二一〇頁)へと変更されて
いる。

しかし最大の相違は、末尾の「エピローグ」が削除され
ているところであろう。主人公は朱鵠と台北の街を遊歴
し、最後に新店溪にやって来るが、旧版では絶滅した台湾
固有種の「庵仔魚」の姿を認めるや、朱鵠は急に駆け出
し、童謡を口ずさみながら暗い淵の中に足を踏み入れる。

この箇所は修訂版ではすべて削除され、したがって次の呼
びかけも姿を消している。

君なんだよ、朱鴿、僕に勇気を奮い起こして南洋での成長の経験点を点検させたのは、心の魔に向き合うよう手を貸してくれたのは、目を見開いて、自分がいつたいたいどんな人間なのか見据えさせてくれたのは。(二五九―二六〇頁)

しかし、その目的がひとたび達せられるや朱鴿は駆け出し、一歩ずつ暗い淵へと踏み入ってゆき、その背後には呼び戻そうとする語り手の声のみが空しく響く。この呼びかけは後に姿を変えて『大河尽頭』冒頭「招魂——朱鴿よ、帰り来たれ」として編入されることになり、『雨雪霏霏』からは除かれる。

(四) 大河尽頭

(1) 概要

英領サラワク・クチン出身の作家である永は、三年前に『雨雪霏霏』で新店溪の黒い淵に沈めた台北の少女・朱鴿の霊を召喚し、過ぎ去った一五歳の夏(一九六二年七月三一日から一五日間)の記憶を語る。

彼は父からの高校合格祝いとして、インドネシアのポンティアナックに三八歳のオランダ人女性クリスティーナを訪ね、彼女の農場でひと夏を過ごすことを許される。彼女はかつて日本軍の収容所に監禁され、二年の間「慰安婦」

とされた経験を持つ。

クリスティーナは永にカプアス川の水源に連れて行くことを約束し、二人は三〇人ほどの白人の男女と共に生命の根源を求めてカプアス川の遡行の旅に出る。しかし途中で様々の不可解な出来事に襲われ、同行者は少しずつ脱落し、一五日の後に二人だけが先住民イバン人の聖山バトゥ・ティバンに登頂する。

永はこの旅路において、ボルネオ島に生きる華人としての原罪意識と、より普遍的な心の魔に対峙し、旅路の果てに生と死、そして性交の三つを経験することで新たな生を授けられる。また、成人して作家となった少年永は、朱鴿を聞き手に、その旅についての語りを通じて追体験することにより、作家李永平は、中国語作家としての出発の地に帰り、ボルネオ島・台湾・アメリカの経験の集大成を遂げる。

上巻「潮流」は「序曲 花東縦谷」から「七月七日七夕浪遊 紅色城市」(七月七日七夕 赤い都市の漫遊)に至る一九の章から成り、下巻「山」は「七月初八凌晨 逃出紅色城市」(七月八日早朝 赤い都市からの脱出)から「月円峇都帝坂」(満月 バトゥ・ティバン)に至る一八の章から成る。各章題には旅の日付が旧暦で織り込まれている。章番号は付されず、目次には章題のみが記されるが、本文ページにはこれに加えて副題が掲げられる。たとえば、「序

曲「花東縦谷」には副題「招魂——朱鶴、帰来！」（招魂——朱鶴よ、帰り来たれ）が、「七月七日七夕 浪遊紅色城市」には「姑媽帶我尋找一個普南姑娘」（おばさんが僕を連れてプナンの少女を探す）が付される。さらに、下巻には序として「問朱鶴…縁は何物？——大河之旅、中途寄語」（朱鶴に問う、縁とは何ぞやと——大河の旅の途中に寄せて）と題する文が掲げられ、本文と同様に朱鶴に語り聞かせる形で執筆の縁起が説かれる。これを加えると上巻と同数の全一九章となりちようど対を為すことから、この序文も黄錦樹の指摘する通り、「小説の一部分であり内在する血肉として設計」⁽²⁰⁾され、上巻の「序曲 花東縦谷」に対応するものと捉えるべきであろう。

(2) 他の作品との関連

李永平は『雨雪霏霏』が『大河尽頭』の「前伝」であると述べている。⁽²¹⁾実際、『大河尽頭』冒頭の「序曲 花東縦谷」では、『雨雪霏霏』の台北の一夜から三年後であることが語られ、花蓮の月夜に語り手は再び朱鶴の魂に呼びかける。さらに、『雨雪霏霏』の結末について「僕たち年の離れた二人は互いに支え合って、一晚中歩き続けた末に川の上流に着き、源流をたどる旅を完成し、君はその手でこの放浪者を家に連れて帰ってくれたが、そこで僕は君を終点に置き去りにし、あの気味悪く深く千年も日光に触れたことのない暗い淵に君を放逐すると、振り返りもせず到大

手を振って立ち去ったのだよ」（上…二二—二四頁⁽²²⁾）と明かされる。

しかし同時に、『海東青』との関係も無視し得ない。たとえば『海東青』には、靳五が夜の街で幼い街娼が警察の目から逃れるのを助ける場面があるが、少女は彼の腕をすり抜け、通りかかった二人の黒人に自らの意思でついて行き、暴行を受けることになる（二二—三二頁）。このエピソードは『大河尽頭』でもインドネシアのシンタンを舞台にした「七月七日七夕 浪遊紅色城市」の章で、主人公の少年・永とプナン少女の邂逅として反復される（上…四二四—四三八頁）。

(3) 版本

『大河尽頭』は二部構成で、麦田出版より二〇〇八年に上巻「溯流」が、二〇一〇年に下巻「山」が刊行された。上巻「溯流」はシリーズ「当代小説家II」の一冊として二〇〇八年に刊行後、下巻「山」の刊行に併せ同じく麦田出版より「李永平作品集」として二〇一〇年に再版されている。

また、二〇一二年四月には簡体字版が上海人民出版社より上下巻同時に刊行されている。この簡体字版は麦田出版のものと同様に、王德威による序論が上巻「大河的尽頭」、就是源頭」、下巻「婆羅洲的『魔山』」としてそれぞれに収録されている。ただし、麦田版では上巻に収められていた

「序曲 花東縦谷」が簡体字版では「簡体版序致 “祖国読者”」へと変更されている。李永平の作品は中国ではないけれども上海人民出版社から出版されているが、刊行順に『大河尽頭』（二〇一二年）、『吉陵春秋』（二〇一三年）、『雨雪霏霏』（二〇一四年）となり、台湾での発表順とは入れ替わっている。このため、『雨雪霏霏』の一夜を回想し朱鶴の霊を呼び戻す「序曲 花東縦谷」は、『雨雪霏霏』刊行前の簡体字版の読者には意味をなさなくなってしまう。よって、作者は簡体字版の自序では大陸の読者に向けて、「祖国」こと「母なる中国」へと呼びかけてみせ、さらにボルネオ島出身で台湾を第二の故郷とするという自らの来歴を説明し、『大河尽頭』の作品解説を行った上で、朱鶴という登場人物の来歴について語るのである。

二 紅色の水先案内人

——内的世界の住人から外的世界の聞き手へ

前節で整理した通り、『海東青』と『朱鶴漫遊仙境』は直接の継承関係を有し、『大河尽頭』は『雨雪霏霏』の続作として位置づけられる。

本稿では以下に便宜上『海東青』と『朱鶴漫遊仙境』の二作をA系列とし、『雨雪霏霏』と『大河尽頭』をB系列と呼ぶことにする。A系列の世界とB系列の世界は、重な

る部分も持ちながらそれぞれ別個に独立しており、朱鶴という少女によって結びつけられてはいるものの、A・B両系列の朱鶴が作中で担う役割は大きく異なる。

A系列の朱鶴は生い立ちが明らかで具体的な肉体を備える少女であり、それゆえに性的欲望の対象となり得る。八歳の無垢な少女として造形される彼女は、同時に急激な経済成長の陰で墮落する台湾をも象徴する。しかしB系列の朱鶴はすでに肉体を失った「霊」であり「ミューズ」であり、語り手の内的世界から踏み出した位置にある。ゆえに語り手は、躊躇なく彼女と同年代の少女たちが性虐待を受けるさまを語り聞かせ、日本軍の「慰安婦」とされたオランダ人女性クリスティーナの物語を受けとめさせるのである。A系列の朱鶴が斬五の内的世界を駆け回る登場人物だとすれば、B系列の朱鶴はその外側にあつて、語り手から言葉を引き出すことで内的世界を明るみに出す役割を担っている。

(一) 運命づけられた淪落

——汚辱の台湾と内的世界の形象化

A系列に登場する朱鶴は、具体的な出自と肉体を兼ね備えている。『海東青』『朱鶴漫遊仙境』からは以下の通り彼女の家庭環境が知られる。

父の朱方は江蘇省の出身で、民国三八年に「耶蘇教の髭

の聖人モーゼが紅海を開いたように」(三〇〇頁) 蔣介石に導かれて台湾に渡り、後に台南県善化鎮人の陳鸞雀を妻とし、朱鸞、朱鷺、朱鵠の三人の娘をもうけた。外省人の父と本省人の母の間に生まれた朱鵠は、「血管を二種類の血がでたらめに流れているようでもあり、二人の大人が体内で喧嘩しているようでもあり、毎日そのせいでめまいはするし落ち着かないし、家にはとてもいられない、死ぬほどイライラして、外の通りに駆け出してもめっちゃめっちゃに走り回りたいくなるの、すっごくつらい日もあって……」(三〇一頁)と語る。

朱鵠の母は日本に「留学」を繰り返しており、朱鵠の家には花井芳雄と木持秀雄という二人の日本の老人が出入りしている。上の姉の朱鸞は師範大学の史学科二年生で、婚約を予定している恋人がいたが、母に休学を強いられ日本に連れて行かれる。あまつさえ『海東青』では母の同意のもとで花井と木持によつて高雄へ連れ出され、料理に薬を入れられて犯されている。一家は娘の身体を提供した見返りとして二人から得た経済援助で、『海東青』の最後に豪華マンションに転居する。『朱鵠漫遊仙境』に至り、父の朱方がいてもおかまいなしに花井が尋ねてきては朱鸞の部屋に泊まるのが常態化しており、朱鸞が妊娠したことも明らかにする。

少女の性が金銭的価値を有するのは朱鵠の家ばかりでは

なく、第二次性徴を迎える前の少女たちさえもが性的対象として扱われ、同時に各種業界が少女の欲望をそそる商品を企画し、風俗産業で働かせるといふ社会の仕組みが完成していることが暗示される。次姉の朱鷺もまだ二四、五歳の学生ながら中山北路のホテルで「公主」のアルバイトを始め、『朱鵠漫遊仙境』にはプリンス・スイートとして売り出されたホステス向けの部屋を買いおうと算盤をはじていると父が語る場面がある(九六頁)。だが、こうした「公主」たちは聞こえの良い名前とは別に、客に關係を強いられれば断れないどころか、コンドームの使用を拒む客から性病をうつされる危険と常に隣り合わせである。朱鵠自身も、『海東青』では花井と木持に、愛情表現だと言われてつねられ腿に痣をつけられるほか、その好みに合わせて大人びた髪型に変えられる。こうして彼女もそう遠くない将来に淪落の運命をたどるであろうことが予感される。

『朱鵠漫遊仙境』においてその予兆は、ピアスの穴を開けられる一幕として試演される。ピアスショップを覗き込む朱鵠たちに、『海東青』から続けて登場する小悪党の安楽新は「女の子は大人になりたいなら、男に一発穴を開けてもらって、真っ赤な血を一滴流さなきゃな」(七四頁)と説明する。そして、朱鵠も安楽新に捕えられると抵抗をなくして店長に引き渡され、あれよあれよという間に日本製

のピアッサーでピアスの穴を開けられてしまう。ただし、その場面は「バンと一つ、銃声が響いた」(八三頁²⁸)とあるのみで、具体的には描写されない。その前にピアスショップの店長が女子高校生の耳に穴を開ける場面があるが、前戯しながらの耳掃除に続いて次のように描写される。

酔いしれたように、その少女は店長の胸にもたれかかり、汗にくもる目を見開き、うわ言のように五、六ばかりあえぎ声をもらし、店長の手の日本製の耳洞銃^{ピアッサー}を見やっつては、ぶるつと身震いし、またまぶたを閉じて店長の胸に身を縮め、両足でしっかりと挟んだ。店長は目を細めてほえみながら店の戸口で中の様子を窺っている男たちをながめ、日本製の銃^{ピアッサー}を取り上げ、おもむろに銃身を磨き、銀のように耀く銃口をびかぴかにすると、背筋を伸ばし、胸の中の少女のつばみのように可憐で柔らかな耳に照準を合わせた。パン！突如銃声が響く。白く店を照らす白熱灯のもと、少女の耳たぶには小さなきらきらした血の花が咲き、つややかな紅色はしたるばかりだった。(八〇―八二頁²⁹)

明らかに性交を模したこの描写は、他の少女の身体によつて示されることを通じ、朱鴿の身体に加えられた行為をも想像させる。予兆としてのこの場面は、最後に朱鴿ら

七人の失踪が語られることによって現実のものとなったことが示される。

『海東青』については、これまでに「鯤京」の街は「家」が疎外された後の記号化された「鬼域」³⁰であり、時間と歴史を欠いた「忘れられた国」³¹として寓話の舞台となると論じられている。また、黄錦樹がジュリア・クリステヴァの〈アブジェクシオン〉³²の概念を適用して、李永平が「三民主義模範省」「復興基地」を象徴的に浄化しようとする³³と分析しているように、欲望と汚穢に満ちた鯤京の街では、少女たちは少女であり続ける時間を許されず、ただちに成熟した女になることを強要される。

こうした分析に加え、鯤京の街が性の隠喩に溢れかえる斬五の内的世界の形象化としての側面を有することも看過し得ない。そこに登場する人物、そこに描かれる情景はいずれも斬五の精神の内奥に存在する何らかの象徴として読み解くことが可能である。中でも、先述の安楽新や、花井や木持ら日本のセックスツーリストが体現する斬五の欲望に注目してみよう。

黄錦樹により斬五と鏡像性が指摘される安楽新は、本名を蔡森郎といい、斬五が同じ下宿に暮らす高校受験生の亜星と一緒にバスに乗っていたところに近寄って来る。彼はその二つ名の由来となった「安楽新」という催眠薬を斬五に勧め、一五歳の亜星に飲ませて処女を奪うよう、繰り返

しそそのかす（一〇六一—一〇八、一三三—一三四頁）。つまりとつて離れぬ彼に苛立つた靳五は、突発的に人目もはばからず暴力を振るう。足払いをかけて転ばせる（一三八頁）のみならず、彼の首を締め上げ、その頭を激しく電柱にぶつけた上、サンダルから出た指を革靴で思い切り踏みこむ（一八六頁）。こうした激しい暴力行為は、安楽新が体現するのは靳五自身の欲望であり、それに力で抗いねじ伏せようとする靳五の苦闘の現れと解することができよう。「傍観者」「過客」「流寓の人」であり続ける靳五が、唯一安楽新に対しては抵抗を見せる。しかし、それも空しく、亜星は安楽新に送られて帰ったのを最後に靳五の前から姿を消す。

鯉京では少女たちの蹂躪が運命づけられており、靳五はいずれ朱鵠も花井と木持の毒牙にかかり、亜星と同様に姿を消すことを予感する。だが彼にできるのは、最後に朱鵠を抱き締めて「きみ、そんなに早く大きくならないでくれ！」（九四一頁）と慨嘆するのみに過ぎない。少女たちの淪落は台湾すなわち「華人文化のミニアチュールの投影」の淪落を象徴すると同時に、靳五および作者の内面の、すでに侵され蝕まれてしまった無垢であり善であるといえよう。その意味において、靳五のまなざしこそが朱鵠を「墮落の洞穴へと送りだした」とする黄錦樹の指摘は鋭い。そしてそのまなざしは、『雨雪霏霏』において「心の

魔」として取り上げられる。

（二）『朱鵠漫遊仙境』における靳五の不在

A系列の『海東青』と『朱鵠漫遊仙境』の相違は、前者が靳五の視点から語られるのに対し、後者は朱鵠の視点から台北の光景が描写されることである。『朱鵠漫遊仙境』では靳五は主人公の地位を朱鵠に譲り、表舞台から姿を消す。張錦忠は、一九八七年冬から八八年春の時間が描かれる『海東青』と八九年夏の『朱鵠漫遊仙境』の間には、書かれていない「中巻」が存在する筈であり、『朱鵠漫遊仙境』において靳五が姿を消している理由が説明される筈だと推測している。

一方、李永平は『海東青』について「この寓話は、書いているうちにどうしたことか文字による巨大な迷宮を築いてしまい、『小説家』である私はアテネのダイダロスさながらに、作品が完成してからふと気づけば自分で創造した迷宮の中に閉じ込められてしまい、痛ましい代償と引き換えにようやく脱出できたのだ」と述べ、さらに「『海東青』の発表後」一年休んで再び出発し、逆境から第一歩を踏み出そうと試みた——たとえわずか半歩であっても——そこで『朱鵠漫遊仙境』を書いた」と語っている。この言葉を手がかりに、靳五の作中からの消失について考えてみよう。

自らの内的世界を彷徨する『海東青』の斬五は、その両眼をレンズとして見たものを時間差なしに映し出す。作者はここで斬五という分身を通じて自らの内面深くに入り込み、その目に映る情景を内側から描き出すことを試み、文字によって迷宮を築き上げたといえよう。そしてそれこそが、斬五が徹頭徹尾傍観者である所以だろう。彼には朱鴿のたどる結末がすでに見えているが、だからといって日本の老人を鯉京から追い返し、安楽新を改心させるすべはないからだ。彼にできるのは、亜星と朱鴿が淪落の道へと歩み出す直前で時間を凝結させ、その時点を彷徨することのみである。

ただし、ここでは斬五と花井や木持、そして安楽新はそれぞれ別の登場人物として描かれている。これがB系列の『雨雪霏霏』『大河尽頭』に至ると、主人公は欲望から切り離された人格として造形されることはなくなり、むしろ主人公の身体に宿された欲望こそ切り離し得ぬものであることが露わにされる。

とすると、斬五の退出は、欲望から切り離された自己というものが、たとえ虚構の作中世界にあつても存立し得ないことの必然の帰結であるのかもしれない。斬五が姿を消した台北で、止まっていた時計は動き出し、悪徳と汚辱に満ちた台北が朱鴿を呑み込む瞬間に向かつて針を進める。

A系列の二作においては、斬五と朱鴿は共に、斬五の内

的世界の中の登場人物として動き回り、この舞台そのものを外側から見る役割はまだ備えていない。それが備わるのは、語り手と朱鴿の対話という形式が完成したB系列の二作に至ってのことである。

(三) 肉体をもたぬ聞き手としての朱鴿

これまで見てきたA系列の二作ではいずれも三人称が用いられ、斬五や朱鴿の内面が細かく語られることはなかった。他方、B系列の二作は主に「李永平」が語り手となり、自分の体験と感情を一人称で饒舌に語る。そして、A系列の三人称からB系列の一人称への転換に伴い、朱鴿には聞き手という新たな役割が附与される。

B系列の二作品の構造を解きあかすには、三人の「永」を別個に扱うと理解が容易かもしれない。三人とは、(1)作者である李永平、(2)作中の語り手、(3)回想の中に登場する幼年期ないし少年期の永である。便宜上これを順に、〈作者永〉〈語り手永〉〈回想の永〉と呼ぶことにしよう。

〈回想の永〉の登場する追憶の世界を、〈語り手永〉は直接体験した過去として語る。だが、〈作者永〉にとつては、〈語り手永〉の過去に仮託して自らの内的世界を形象化したものである。さらに〈作者永〉は〈語り手永〉に、過去を見つめるまなざしを通じて自らの「心の魔」ないしは欺瞞に満ちた傍観者の視線を剔抉する作業を強いる。

A系列の二作をこの図式に当てはめてみると、斬五は「回想の永」に相当し、「鯉京」ないし台北の街はB系列の追憶の世界に相当することになる。つまり、斬五の内的世界は、B系列では不可逆の過去として回想の中に封じ込められているのである。先に記したように、『海東青』のエピソードが『大河尽頭』で繰り返し変奏されることから、B系列の回想がA系列の斬五の内的世界であることが首肯されよう。

『朱鶴漫遊仙境』の結末で一度死を迎えた朱鶴は、『雨雪霏霏』では肉体をもたない台北の少女として「語り手永」の前に復活し、共に「回想の永」の言動を仔細に検分する。たとえば『雨雪霏霏』において、「語り手永」が肝心なところを言葉にせずに物語を先に進めようとする時、朱鶴はそれを許さず、彼に「回想の永」を直視させようとする。たとえば、「語り手永」が幼い頃にこっそり故郷ボルネオ島クチンの風俗街に潜り込んだ経験語り、そのときに受けた衝撃が、そこにいた娼婦たちが「中国人の娘」ばかりであったことに由来すると明かす場面である。朱鶴はその説明に満足せず「語り手永」を問い詰める。

——じゃあ聞くけど、もし女の子たちがマレー人やインド人、それともダヤク人だったら、それでもそんなに悲しかった？

——悲しいさ！ ただ……

——ただ何なの？

——ただ……感じが違うんだ。

——どう違うの？ どうして違うの？

——僕は……お願いだ！ 君、頼むからそんな刃物のような眼を見開いて、冷ややかに睨みつけないでくれよ！（八〇―八一頁）⁽⁴³⁾

こうした朱鶴の役割こそがまさに、修訂版で削除されたエピソードにあったように、「語り手永」に過去の経験や「心の魔」と対峙させ、「自分がいたいどんな人間なのか見据えさせてくれた」ということになるだろう。

中でも特に残忍なエピソードは、最後の「追憶九望郷」において、台湾出身の元「慰安婦」たちの「姦通」を警察に通報するものであろう。七歳の「回想の永」は、この三人の台湾人女性にかわいがられ、連日その住まいに遊びに行くうちに、彼女らの「私生児」であると噂を立てられるに至る。彼は生みの母を悲しませまいと、「お母さんに気持ちを伝えるため、クチンの町中の人に、僕がいちばん気にかけているのはお母さんだと知ってもらうため」（二五一頁）⁽⁴⁴⁾に三人を裏切る。ここでは、生みの母と台湾人女性に寓せられた意味が重要であろう。

台湾出身の三人の女性は、日本軍の「慰安婦」としてボ

ルネオ島まで連れて来られたまま、戦後も家族に合わせる顔がないと帰郷せず、売春によって生計を立てている。彼女らの身体は日本兵によって損なわれ、腕に「慰」の字を刺青された上、和服をまとって「いらっしやいませ」とお辞儀をして客を迎えるといった仕草に至るまで、抜きがたく日本化されている。すなわち、彼女らが体現するのは、『海東青』の鯤京同様に、淪落し日本に刻まれた痕跡を消し去ることのできない台湾である。〈回想の永〉はすでに蹂躪された彼女らに思慕を抱く一方で、母として認めることは拒絶し、生みの母ひとりが母だと声高に宣言する。これはボルネオ華人としての〈作者永〉が、純潔の中国のみを母として認め、たとえ「第二の故郷」ではあっても淪落の台湾を受け入れはしないという姿勢を暗示するようでもある。

生母以外の女性を母と認めるかどうかという問いは、『大河尽頭』においても反復される。ここで登場するのは同じく日本軍の元「慰安婦」であるが、同時にボルネオ島における植民者でもあるオランダ人のクリステイナである。しかし、〈回想の永〉は、大河の旅の終着点の手前で、生みの母・クリステイナ・ボルネオ先住民ケニヤナの少女マリアの姿を幻視する（下…四八五頁）。これはこの三人がいずれも彼の母にほかならないことを象徴する。⁽⁴⁵⁾そして、最後にバトウ・ティバンの山頂で、〈回想の永〉

はクリステイナによって再び生を受ける。つまり、彼は原郷としての中国、オランダに代表されるボルネオ島の植民者、加えてボルネオ先住民のすべてを母に持つ「ボルネオの子」として再生されるのである。

ここにおいて不在の台湾は、〈語り手永〉による朱鵠への語り聞かせという形式を通じ、物語の前提を成している。この作品は台湾の象徴たる朱鵠なくして存立し得ない、台湾への呼びかけの書であるとも見る事ができよう。そしてそれは同時に、〈作者永〉を中国語作家としての旅の原点に連れ帰ることで、ボルネオ島・台湾・アメリカの経験の集大成を遂げさせることでもある。

結び

朱鵠という名前は、赤いセキレイ、そして「紅塵」すなわち俗世あるいは濁世を飛ぶ小鳥という視覚的イメージを喚起する。『朱鵠漫遊仙境』では、三度にわたって彼女が小鳥に喩えられる。斬五は「まったく紅塵の街を飛びまわって、あちこちぶらついていて、日がな一日巣に帰らない小鳥みたいだね」（一一四頁）⁽⁴⁶⁾と言い、斬五の同僚の丁教授も同様に「紅塵の街を飛びまわる小鳥だ」（二三二頁）⁽⁴⁷⁾と嘆息する。同級生の連明心さえも朱鵠を「追追」する、すなわちさまよい放浪する小鳥と称するが、それを聞いて

朱鴿は明心こそが自分の理解者だと感じる。『海東青』『朱鴿漫遊仙境』の彼女には帰るべき家がありながらも、日本の老人が待ち受けるその場所に帰ることを肯んぜず、街を「追追」し続ける。その意味で台北の少女朱鴿は、南洋の「浪子」である斬五と同様に、帰る場所を持たない。

『大河尽頭』では、川沿いに宿を求めて翌朝出航するたびに、水先案内人ながらに舟の先を飛んでゆくアオサギやミサゴ、ナンヨウシヨウビン、イソシギといった水鳥の様子が描写される。そして朱鴿も水鳥になぞらえられる。

「水先案内鳥は、ボルネオ島の大河の宿場ごとに交代で見張りに立ち、行き交う船舶を見守るナルキッソスたちで、身体はあんなに小さく、表情はいつもあんなに孤独なのに、あれほどまでに責任に忠実で、風雨に負けず、まるで——後にこの南洋の放浪者を迷宮ながらの色とりどりに輝く台北市に連れて行き、妖精のように痕跡を残さず、任務を全うすると、ひらりとあの淵に身を消してしまった少女、朱鴿、きみ、僕の心の永遠のお嬢ちゃん」（上…一七一—一七二頁）。

李永平の四部の長篇作品の中で朱鴿が果たす役割は、まさに自由に飛びまわり好奇心に満ちた瞳に台北の姿を映し出す小鳥から、内的世界の最深部へと導く水先案内人へと変遷してゆく。

『海東青』『朱鴿漫遊仙境』では、朱鴿はそこに描き出さ

れる斬五の内的世界の登場人物として飛びまわる。そこで幼い少女の姿をとった彼女が象徴するのは、内なる無垢であり善である。ただし、それは成人した斬五の内面においてはすでに「心の魔」によって犯され穢されている。したがって朱鴿も淪落への道を歩むことが決定づけられている。同時に、外省人を父に、本省人を母に持ち台北に暮らす彼女は、台湾を体現する存在でもある。めざましい経済発展の陰で少女たちの性を搾取する台湾もまた、日本統治の陰影から抜け出し得ずにおり、朱鴿の一家も娘の性と引き換えに日本の老人から経済的恩恵を受ける。

『雨雪霏霏』『大河尽頭』においても、朱鴿は内的世界の無垢や善の象徴であると同時に、台湾を象徴する。しかし彼女はすでに悪徳の都たる台北および斬五の「心の魔」に呑み込まれて肉体を滅ぼされており、「鴿」と同音の「霊」、ないしミューズとして復活した彼女が〈語り手永〉を帰郷の旅に誘う。彼女は内的世界を外側から見つめ、聞き手として〈語り手永〉を〈回想の永〉と対峙させる。『大河尽頭』では台湾を象徴する彼女に導かれ、台北の街からボルネオ島の心臓部にある聖山バトゥ・ティバンに帰り着くことで、〈作者永〉は植民地ボルネオと台湾の経験を合一させ、中国語作家として集大成を成し遂げたといえよう。

〈1〉 李永平的經歷と作品については、拙稿「李永平『大河尽頭』の寓意」参照。

〈2〉 本論での引用は二〇〇六年の第二版に基づく。

〈3〉 本論での引用は二〇一〇年の第二版に基づく。

〈4〉 本論での引用は、特に断りのない限り二〇一三年の全新修訂版に基づく。

〈5〉 本稿では上下巻を併せて『大河尽頭』と略称し、引用に際しては上下巻の別と頁数のみを記し、上巻は二〇一〇年の二版に基づくものとする。

〈6〉 本論での引用は特に断りのない限り一九八六年の洪範書店版に基づく。

〈7〉 新京報網「李永平——人生不外一个“縁”字」（二〇一五年三月二七日閲覧）。原文は「写作過程中，每個作家都會在心裡設定一個讀者或「聽者」，聽我講故事的人，朱鴿，雖然是個八歲小女生，雖然永遠長不大（她是繆斯，不能長大變老的！）但冰雪聰明，「二顆心生了七八個竅」，且通達人情世故（莫忘了她是在台北街頭遊蕩廝混的），最重要的是，跟我有靈犀一點通。這樣的讀者／聽者，是作家們夢寐以求的敘述對象。衆裡尋他千百度。能夠找到朱鴿，是我写作生涯中最大的福氣」。

〈8〉 李永平「再版序」『海東青——台北的一則寓言』聯合文學，二〇〇六年，第二版，五頁。原文は「本来應該利用再版的機會，將全書文字徹底處理一番，提高這部小說的

「醇度」，（中略）修訂的工作只好另等機緣了」。

〈9〉 同右，二頁。原文は「當時是在某種奇特的情況下匆促写成的，並不能代表我對這本書的真正感覺」。

〈10〉 李永平「（經典版序）永遠的八歲」『朱鴿漫遊仙境』聯合文學，二〇一〇年，第二版，三頁。原文は「我決定一字不易，甚至不改動一個標點符號，（……）重現世間」。

〈11〉 原文は「多年前我有幸結識朱鴿，一大一小兩個人攜手打造一樁奇妙的縁。那時我在台北某大學外文系教書，每天傍晚放學回宿舍，總是看見一個小小女生，孤單單，蹲坐在市立古亭小學門口台階上，身旁攔著書包，雙手摟住膝頭，仰著臉子睜起眼瞳絞起眉心，呆呆瞅望著城西淡水河口海峽中那一輪載浮載沈的猩紅太陽，好久好久，都不願返回巷弄中的家，只顧痴痴想著自己的心事」「然而有一天，她却突然不見了」。

〈12〉 黃錦樹「漫遊者、象徵契約與卑賤物——論李永平的『海東春秋』」注七・注八参照。

〈13〉 李永平は「簡體版序 河流之語」において、台灣大學三年の時に實際に経験した出来事としてこのエピソードを語り、台灣の河川に関するもっとも忘れ得ぬ思い出であると記している（『雨雪霏霏——婆羅洲童年記事』上海人民出版社，二〇一四年，一一—一二頁）。

〈14〉 李永平『雨雪霏霏（全新修訂版）』麦田出版，二〇一三年（王德威「原罪与原鄉」李永平『雨雪霏霏』、李永平「写在《雨雪霏霏》（修訂版）卷前」、同「河流之語——《雨雪霏霏》大陸版序」を併収）。

〈15〉 李永平『雨雪霏霏——婆羅洲童年記事』上海人民出版社、二〇一四年。王德威「原罪与原鄉」、簡體版自序「河流之語」を併収。

〈16〉 李永平『雨雪霏霏——婆羅洲童年記事』天下遠見出版、二〇〇二年。原文は「我不是人、我是魔」。

〈17〉 李永平『雨雪霏霏（全新修訂版）』麦田出版、二〇一三年。原文は「我是罪人，你們拿起石頭打我吧！就像聖經中描写的那樣」。

〈18〉 李永平『雨雪霏霏——婆羅洲童年記事』天下遠見出版、二〇〇二年。原文は「是你，朱鴿，讓我鼓起勇氣檢視我在南洋的成長經驗，是你幫助我面對心中的魔，是要你睜大眼睛，看看自己到底是個怎樣的人」。

〈19〉 ただし、下巻の「八月八日斷腸日 少年永迷乱的一天」（八月八日斷腸の時 少年永の混乱の一日）のみは新暦の日付が用いられている。

〈20〉 黃錦樹「石頭与女鬼——論《大河尽頭》中的象徵交換与死亡」二四一—二六三頁。原文は「作家」把它設計為小說的一個部分、內在的血肉」。

〈21〉 李永平「簡體版序 河流之語」『雨雪霏霏——婆羅洲童年記事』上海人民出版社、二〇一四年、一九頁。

〈22〉 原文は「咱倆一大一小互相扶持，歷經一夜跋涉終於走到了河溪上游，這趟溯源之旅完成了，妳親手把我這個浪子帶回家了，我便把妳留在終點站，將妳放逐到那一窟陰冷幽深千年不見天日的黑水潭，頭也不回，自個揚長去啦」。

〈23〉 なお、李永平は『雨雪霏霏』『大河尽頭』に、二〇一

三年の時点で執筆中の長篇『朱鴿記』を加え、『李永平大河三部曲』と呼んでいる（李永平「写在《雨雪霏霏》（修訂版）卷前」『雨雪霏霏（全新修訂版）』麦田出版、二〇一三年、一六頁）。

〈24〉 李永平『朱鴿漫遊仙境』。原文は「就像耶穌教那個大鬍子聖人摩西分開紅海」。

〈25〉 同右。原文は「就好像兩股血液在我血管裡，乱竄乱流，好像兩個大人在我身体内打架，每天把我整得暈頭轉向坐立不安，在家裡实在待不住，煩躁得要死，只想逃到外面大街上乱跑乱逛，有時候好痛苦哦——」。

〈26〉 李永平は詹閱旭によるインタビュー記事の中で、『海東青』の日本人の原型は黃春明『さよなら・再見』といった台湾の作品に由来すると語っている。ただし、ボルネオはかつて日本による三年間の占領を経験しており、戦後にはビジネスマンとして戻って来た日本人の姿を目にしていたため、日本人に対するイメージはボルネオにいた頃にすでに形成されていたとする。また、作中では南京事件を起こした部隊で闘った旧日本兵が、戦後は台湾にやってきて児童買春を行うという描写も反復されており、ボルネオ・台湾、ひいては「原郷」である中国の侵略者であった日本人が、戦後には台湾社会の墮落に寄与しているという寓意も等閑視すべきではないだろう。

〈27〉 李永平『朱鴿漫遊仙境』。原文は「女孩子想長大，就要被男人打一槍，穿個洞，流一滴紅紅的血」。

〈28〉 同右。原文は「砰然一声，銃声響起」。

〈29〉 同右。原文は「如醉如痴，那女生臥伏在老闆的胸脯上，睜開汗濛濛的兩隻眼睛，夢囈般呻吟了五六聲，望望老闆手上握著的日本耳洞槍，猛一哆嗦，又闔起眼皮退縮回老闆的懷抱裡，把兩條腿兒緊緊夾住。老闆笑謎謎望了望店門口窺探的一堆男人，擎起日本槍，慢吞吞擦拭著槍身，把那銀樣燦爛的槍頭擦亮了，腰桿子一挺，拳槍瞄準懷中女生那蓓蕾般嬌嫩的耳朵。砰！槍聲驟響。白雪雪滿堂日光燈下，女生耳垂上綻放出了小小一蕊子晶瑩的血花，嬌滴滴紅氈氈」。

〈30〉 張錦忠「在那陌生的城市——漫遊李永平的鬼域仙境」。

〈31〉 黃錦樹「在遺忘的国度——讀李永平《海東青》」（上卷）。

〈32〉 ジュリア・クリステヴァ『恐怖の權力——〈アプジェクシオン〉試論』。

〈33〉 黃錦樹「漫遊者、象徵契約與卑賤物——論李永平的『海東春秋』」。

〈34〉 同右。

〈35〉 同右。

〈36〉 原文は「丫頭，不要那麼快長大！」。

〈37〉 王德威「原鄉想像，浪子文學」一七頁。原文は「華族文化具體而微的投影」。

〈38〉 黃錦樹「漫遊者、象徵契約與卑賤物——論李永平的『海東春秋』」六二頁。原文は「是斬五的目光把她推向那墮落的洞穴」。

〈39〉 張錦忠「在那陌生的城市——漫遊李永平的鬼域仙境」。

しかし、實際のところ、『海東青』の作中にみられる日付は、何年のものかは明示されない。第一部第四章「蒙古冷気団源源南下」（シベリア寒気団は南下を続ける）における「紅色中国」で「血腥鎮圧」が行われたとの会話（一六六頁）が、一九八七年九月および一〇月のラサでのデモとその鎮圧を指すものとすれば、確かに一九八七年秋から八八年春が時代背景として比定可能であろう。ただし、第二部第六章「迫退」で報じられる石原慎太郎の米誌『プレイボーイ』インタビュー（三一三頁）は一九九〇年一〇月のものであり、五月一二日が母の日（第二日曜）（九一〇頁）となるのは一九九一年であることから、時間の経過を正確に特定することは困難である。さらに、『朱鵠漫遊仙境』でも、朱鵠一家は九五頁では二カ月前に転居したとされるが、一一四頁では転居から半年とされ、転居の時期に齟齬が見られるため、両作の間に経過した時間を確定するのは困難である。『海東青』は執筆時期である一九八七年から九一年にかけての四年間の台北の情景を、「鯤京」の街の八カ月間として描いたものであり、現実に合わせて時間が進行するわけではないと見るのが妥当であろう。

〈40〉 李永平「文字因緣」四三頁。原文は「這則寓言寫到後來，不知怎的竟建構出一座巨大的文字迷宮，而我這個『小說家』竟也像雅典名匠戴達魯士，在作品完成後，驀然驚覺，發現自己已被囚禁在自己創造的迷宮中，必須付出慘痛代價才得以逃脫」。

〈41〉 同右，四四頁。原文は「歇息一年重新出發，試圖從困

境中跨出第一步——哪怕是小小的半歩也好——於是写了《朱鴿漫遊仙境》。

〈42〉なお、作者は意図的にこれら三人の永を同一視するよう読者を誘導する仕掛けを施している（拙稿「李永平『大河尽頭』の寓意」参照）。

〈43〉原文は「——那我問你，如果這些女孩子是馬來人、印度人或拉子婦，你還會不會感到那樣傷心呢？——會！只是……——只是什麼呢？——只是……感覺不一樣。——怎麼不一樣呢？為什麼會不一樣？——我……拜托妳別問！丫頭，請妳不要睜著妳那兩隻像刀子一樣的眼睛，冷冷的瞪著我，可以嗎？」。ただし、原文の改行箇所は／で示した。

〈44〉原文は「為了向我媽表明心迹，為了讓全古晉的城人知道，我最在意的人是我的親生媽媽」。

〈45〉拙稿「李永平『大河尽頭』の寓意」参照。

〈46〉原文は「妳啊就像一隻飄飛在紅塵都市中的小鳥，愛四處遊逛，成天不歸巢」。

〈47〉原文は「妳是一隻飄飛在紅塵都市中的小鳥！」。

〈48〉原文は「領路鳥，沿著婆羅洲大河一站又一站，輪流放哨，守望來往船舶的水仙子們，個個頭總也那麼嬌小，神色老是那麼孤獨，可又是這樣的尽心盡責，風雨無阻，就像——就像後來引領我這個南洋浪子進入迷宮樣五光十色的台北市，精靈般來去無蹤，完成任務後，就蹦地消失在溪潭中的那個小姑娘，朱鴿，妳，我心中永遠的丫頭」。

参考文献

- 王德威「原鄉想像，浪子文學」『迢迢——李永平自選集』麦田出版，二〇〇三年，一一—二五頁
- 及川茜「李永平『大河尽頭』の寓意」『野草』第九四号，二〇一四年八月，一四八—一六八頁
- 及川茜「日本人の性的表象——南洋を描いた中国語小説——貴志俊彦他編『相關地域研究1 記憶と忘却のアジア』一八八—二二二頁
- ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力——〈アブジェクシオン〉試論』枝川昌雄訳，法政大学出版社，一九八四年（Julia Kristeva, *Pouvoirs de l'horreur. Essai sur l'abjection*, Paris: Seuil, 1980）
- 黄錦樹「在遺忘的国度——読李永平『海東青』（上巻）」『馬華文学与中国性 増訂版』麦田出版，二〇一二年，二三—二六二頁（初出『台湾文学觀察』第七期，一九九三年六月，八〇—九八頁）
- 黄錦樹「流離的婆羅洲之子和他的母親、父親——論李永平的『文字修行』」『馬華文学与中国性 増訂版』麦田出版，二〇一二年，二〇一—二三四頁（初出『中外文学』第二六卷五期，一九九七年一〇月，一一九—一四六頁）
- 黄錦樹「漫遊者、象徵契約與卑賤物——論李永平的『海東春秋』」『謊言與真理的技藝——当代中文小說論集』麦田出版，二〇〇三年，五九—七九頁（初出『中外文学』第三〇卷第一〇期，二〇〇二年三月，二四—四一頁）

黃錦樹「石頭与女鬼——論《大河尽頭》中的象徵交換与死亡」『台灣文學研究學報』第一四期、二〇一二年四月、二四一—二六三頁

詹閱旭「大河的旅程 李永平談小說」『印刻文學生活誌』第四卷一〇期、二〇〇八年六月、一七五—一八三頁

張錦忠「在那陌生的城市——漫遊李永平的鬼域仙境」『中外文學』第三〇卷第一〇期、二〇〇二年三月、一二—二三頁

李永平『吉陵春秋』洪範書店、一九八六年

李永平『吉陵春秋』上海人民出版社、二〇一三年

李永平『吉陵鎮ものがたり』池上貞子・及川茜訳、人文書院、二〇一〇年（李永平『吉陵春秋』洪範書店、一九八六年）

李永平『海東青——台北的一則寓言』聯合文學、二〇〇六年、第二版（初版は一九九二年）

李永平『朱鴿漫遊仙境』聯合文學、二〇一〇年、第二版（初版は一九九八年）

李永平『雨雪霏霏——婆羅洲童年紀事』天下遠見出版、二〇〇二年

李永平『雨雪霏霏（全新修訂版）』麦田出版、二〇一三年

李永平『雨雪霏霏——婆羅洲童年紀事』上海人民出版社、二〇一四年

李永平「文字因緣」『迢迢——李永平自選集』麦田出版、二〇〇三年、二七一—四七頁

李永平『大河尽頭』上卷…溯流、麦田出版、二〇〇八年（二〇一〇年第二版）

李永平『大河尽頭』下卷…山、麦田出版、二〇一〇年

新京報網「李永平——人生不外一個『緣』字」 2012-05-19
<http://www.bjnews.com.cn/book/2012/05/19/199850.html>（二〇一五年三月二七日閲覧）